

# 広域で取り組むジオパークの目指し方 —伊豆半島ジオパークの場合—

高橋 誠\*

A proposal for establishing a broader based geopark in Japan  
—Referring to the case of Izu Peninsula Geopark—

Makoto Takahashi\*

## はじめに

近年、多くの自治体や団体がジオパークに注目している。ジオパークと呼ばれる地域は、多数の価値ある地球活動の遺産を保護し、それらを科学や教育の普及啓発や、信頼できるツーリズムの展開などの持続可能な経済活動に活用している。最近では防災教育への取組も重視されている。

筆者は伊豆半島ジオパーク推進協議会の事務局員として、平成23年度から2年間、事務局立ち上げから日本ジオパークネットワーク加盟認定までの初期の活動を担ってきた。

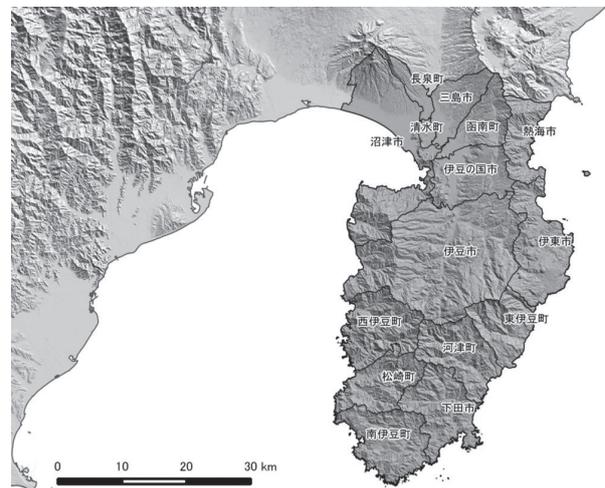
日本全国のジオパークを見渡すと、1村だけの小さな面積、少ない人口のジオパークもあれば、複数の市町村からなる広大な面積、多くの人口を抱えるジオパークもある。伊豆半島ジオパークは、静岡県東部にある伊豆半島地域15市町の行政区域を範囲とし（第1図）、2012年9月、東海地方初の日本ジオパークとして日本ジオパークネットワークへの加盟が認められた。2014年9月現在、国内のジオパークとしては、面積は5番目、市町村数では2番目、区域内の人口が最も多いジオパークである。

2014年10月5日に豊橋市自然史博物館で開催されたシンポジウム「東三河のジオパークへ向けて」にお

いて、広域でジオパークを推進していくにあたり、伊豆半島ジオパークを中心に、その成功例や反省例を交えながら講演した。広域のジオパークには、広域だからこその面白さ、難しさが数多くある。本稿は、その講演内容をまとめたものである。

## 伊豆半島におけるジオパーク活動

伊豆半島は、はるか南洋の海底火山として誕生し、プレートの活動に併せて北上し、本州に衝突して半島



第1図. 伊豆半島ジオパーク構成自治体。

\*静岡県文化・観光部観光交流局観光政策課・Tourism and Exchange Bureau, Shizuoka Prefectural Government. 9-6 Outemachi, Aoi-ku, Shizuoka 420-8601, Japan.

原稿受付 2015年1月20日。Manuscript received Jan. 20, 2015.

原稿受理 2015年1月23日。Manuscript accepted Jan. 23, 2015.

キーワード: 伊豆半島, ジオパーク, 15市町, ジオパークネットワーク。

Key words : Izu Peninsula, geopark, 15 municipalities, geopark networks.

化したもので、本州では唯一フィリピン海プレート上にある珍しい半島である。これをうけ、伊豆半島ジオパークは、「南から来た火山の贈りもの」をメインテーマとしている。日本ジオパークネットワークへの加盟審査の際には、その特異な成り立ちがわかる多数のジオサイトに加え、美しい景色を上手に語るジオガイド、地元の地質の貴重さを理解し保全に関わる住民の活動などが高い評価を受けた。

では実際にどのようなジオパーク活動が展開されているのか、その一端を「鉢窪山ジオサイト」を例に紹介する。

「鉢窪山ジオサイト」の中心の鉢窪山は、活火山に指定されている伊豆東部火山群の一つで、その山体はこんもりとした愛らしい形をしている（第2図）。約1万7000年前の噴火活動で形成された「単成火山」で、流れ出た溶岩の縁には、有名な演歌にも登場する「浄蓮の滝」がかかっている。滝では柱状節理が見られ、溶岩の特徴的な割れ方やその仕組みなどを学ぶことができる（第3図）。また近くの沢では、溶岩の隙間から湧き出す豊富な湧水を使ったわさび栽培が古くから行われている。

滝近くの国道沿いにある森のカフェ「かたつむり」には、台風などで道路に転がり落ちてきた大きなスコリアをカフェの主人が積み上げて作ったピザ窯があり、その窯を使ったピザ焼き体験ができる（第4図）。ピザの具は、火山ならではの養分豊富な土で育った地元の食材を使う。素材もさることながら、地元の人と会話をしながら自分で焼いたピザはその味も含めて格別である。また駐車スペースにも、鉢窪山の火口から噴出したスコリアが敷き詰められている。

このように大地とそこに住む人々の生活とは密接に結びついており、それらを経済活動に生かしつつ、その貴重さや素晴らしさを、学びや食、遊びを通じて住民や観光客に伝えられることがジオパークの醍醐味である。これらの活動を通じ、大地の価値と面白さを知ると、地質遺産等の保全意識の高揚にも繋がる。

伊豆半島では、ジオパークへの取り組みを通じて、特に観光地の景観に対する保護・保全意識が高まった。また、地元の食材や特産品への価値付け、子供達の郷土愛、郷土への誇りを育てることに繋がり、ジオパークに取り組む意義は非常に大きい。

## ジオパークを目指すということ

ジオパークを目指すということは、このような地域

づくりをしていくという宣言に他ならない。一般的には、これから地域の合意形成をしていく段階であれば、価値ある地質遺産の存在に注目することは大事となるが、住民や観光客に対し、地質・地形に関する学術的価値の押し売りにならないよう充分注意する必要がある。併せて、ジオパークが地域課題の解決を導くものとなりうるかどうか検討する必要がある。



第2図. 鉢窪山と溶岩台地上の田.



第3図. 浄蓮の滝で見られる柱状節理.



第4図. スコリアを積み上げたピザ窯.

伊豆半島の場合は、温泉・花・グルメ・ゴルフなど同様の特色をもつ他の観光地との差別化を図り、観光地「伊豆」として、新たな魅力の創出や開発といったテコ入れをする必要があった。また、何をするにも一体感が乏しく、まとまりのなかった伊豆を「伊豆はひとつ」を合言葉に、半島内のどの地域も「伊豆」であることを意識しながら、一体感の醸成を図る最後の切り札として、ジオパークが選択された。

これらの課題の解決は未だ道半ばであるが、ジオパーク活動に取り組むことで、伊豆半島内の各地域の住民がこれまで以上に繋がり、半島内の交流も明らかに増加していると感じている。

## 広域で進めるジオパーク活動のために

### (1) 広域ゆえの課題

伊豆半島ジオパークは、前述のとおり15市町でジオパーク活動に取り組んでいる。糸魚川世界ジオパークのように1つの自治体で取り組む場合、ジオパーク活動を基幹政策に据えて、様々な部門と協力、分担して施策を実施することが比較的容易にできる。

しかし、広域でジオパーク活動に取り組む場合は、各構成自治体が同程度の活動推進体制を取りつつ、かつ推進母体となる広域の推進協議会とも歩調を合わせていくことはかなり難しい。このため、住民や各種団体はもちろん、首長においても総論賛成、各論反対となることが多い。広域のため、物理的に一箇所に集まるのが難しく、意思決定や多方面での統一した施策実施は難しい。

また、ジオパーク活動の核となる組織形態（人員配置）も同様である。広域の場合、情報の集約と拡散をいかにうまく行うかがジオパーク活動を推進する際の課題となる。広範なエリアにジオサイトが点在するとなれば、情報拠点も複数必要となり、さらに観光案内所などを含めた連携を活発に行う必要があるためだ。だが、事務局に人員が少ないと、全ての情報を把握することが困難となり、各エリアとの情報のやりとりが不十分になってくる。

広域のジオパークでは、三陸や南紀熊野のジオパークのように県が事務局機能を担っている場合が大多数だが、中には立山黒部ジオパークのように民間を中心とする場合もある。伊豆半島ジオパークの場合は、伊東市に事務局が設置されているが、広域ゆえの膨大な業務量の割には、自治体からの職員派遣はまだ少ない。東三河地域の場合も、各自治体からの職員派遣などの

検討が今後必要になっていくことと思われる。

### (2) 広域ゆえの強みと意義

では、広域であることはデメリットだけかと言えば、そのようなことはない。それゆえの強みもある。

例えば、世界ジオパークを目指すのであれば、日本を知らない外国人に対し、「世界的に価値がある」ジオパークだと言い切るためには、遺産やテーマの唯一性、独自性などが求められる。地質や地形は必ずしも行政境界どおりではないため、広域である方が自ずと説得力を増す場合が多い。

また観光客も、広域で行き先を考えることが多い。観光客に広域でテーマ性を持った情報を与え、周遊させる方法を考えることは、地域振興の醍醐味であり、村おこしとは異なる大きな意義をもった活動となる。

そして広域であればあるほど、様々な個性、アイデア、プレイヤーが出てくる。伊豆半島ジオパークでは、最南端の南伊豆町に「風景を切り取ってお菓子にする」というキャッチコピーで、伊豆の地質を本物と見紛うような出来映えのお菓子にしてしまう「ジオガン旅行団」という女性2人組が現れた（第5図）。彼女たちはフランス語の翻訳者とデザイナーであったが、ジオパークのガイド養成講座を通じてジオパークに触れ、お菓子をきっかけに足を運んでもらうという発想で、ガイドの一手段としてお菓子を作っている。他にも熱心な高校教諭、ジオサイトを生け花で表現するガイド（第6図）、「海もジオパーク」と海底地形にも注目した漁師など、伊豆半島内の各地域に個性的なプレイヤーが現れた。地域の住民にとって「ジオパークが自分に関係のあるもの」とわかれば、広域であればあるほど面白い発想が生まれてくるはずである。さらに、今までになかった地域間連携事業の創出につながり、



第5図. 「ジオガシ」9種類.



第6図. 「大室山（左奥）」と「城ヶ崎海岸（右手前）」を表現した生け花.

県やメディアなどに取り上げられる機会も多くなる.

### ジオパークはネットワーク

最後にジオパークで最も重要なことは、「ジオパークはネットワーク」ということである。「ジオパークになる」ということは、日本や世界の「ジオパークネットワークに加盟する」ということである.

ネットワークの一員（会員）であるということは、わからないことは他のジオパークに聞けば良いし、全国大会などの機会に、他の地域の取組を学ぶこともできるということである。逆に自分の地域の取組や研究を紹介することで、他地域に貢献し、互いに影響を及ぼし合うことができる。

ジオパークはまだ歴史の浅い新しい活動であるから、国際会議や全国大会の度に、様々な事柄が変化・進化している。ネットワークに参画する意義が強いのもジオパークの特徴である。新しい知見や地域課題の解決方法も転がっているかもしれない。

### 謝 辞

このような機会を与えてくださった豊橋市自然史博物館の皆様感謝申し上げます。また、地質や火山の楽しみ方を教えてくださった静岡大学教育学部の小山真人教授、伊豆半島ジオパーク推進協議会の鈴木雄介専任研究員のお二人をはじめ、全国大会などで数えきれない知識と経験をくださった日本ジオパークネットワークに関わる多くの関係者の皆様はこの場を借りてお礼申し上げます。